

韓国の英語教育に学ぶ

東條加寿子

未だ寒さ厳しい韓国を訪れ、ソウル近郊のパジュ英語村に足を運んだ。アジア隣国の英語教育の実態を調査し広い視野から日本の英語教育について考えることを目指す、本学教員養成課程の新科目「教職フィールドワーク」企画立案のためである。

よく知られているように、韓国は国策として英語教育を推進している。韓国では1997年の第7次教育課程（日本の学習指導要領に該当）の告示を受けて小学校3年生からの英語必修化がスタートし、3年生で「聞くこと」「話すこと」4学年で「読むこと」5学年で「書くこと」と段階的に目標を定めて教科として教えられている。その結果、例えば、小、中、高を通して習得目標とされる語彙数は約8000語で、日本の中、高での3000語を大きく引き離している。テキスト本文の分量についても日本の2~4倍と言われる。そして、2008年李明博大統領による新政権が発足すると、日本円で約4500億円を投じてさらなる英語教育改革が推進されるに至り、国際的な競争力をつける上で外国語（特に英語）ができる人材の育成が不可欠であるとの国家政策の一端を担う。ちなみに、2011年度のTOEIC公開テスト受験者数は日本が約75万人であったのに対して、韓国は約210万人。2011年度公開テストの平均点は日本が576.9点（リスニング317.1点、リーディング259.8点）、韓国が633.8点（リスニング344.9点、リーディング288.8点）であった。

国策としての英語教育政策を背景に、韓国では2000年ごろから英語村が建設され、現在では国内随所に約30の英語村がある。パジュ英語村は2006年に開設した韓国最大の英語村の一つで、第3セクター方式で京畿郡が運営に関わっている。ソウル市内からバスで40~50分。一見、テーマパークかと思うほどの広大な敷地に欧米風の英語研修施設、参加者やスタッフのための寮、管理運営のための建物、レストランや店が配置され、自給自足的な英語空間を構成している。メインゲートでは空港の入国管理局さながらにパスポートを提示して“入国”が認められ、ここから英語仮想空間での英語漬けの研修が始まる。当英語村のジェネラルマネージャーから受けた説明によると、京畿郡の中学生は、正規の授業の一環として14歳（中学2年）のときに1週間、この英語村で英語研修を受けるとのことである。パジュ英語村はこの他に、小学生から大学生、社会人を対象とした英語研修や、英語教員を対象とした研修を国内外の参加者に提供している。筆者が訪問した際には、米国の某大学院との提携によって、MBAコースに進学希望の留学生向け英語研修が4週間にわたって実施されていた。

目を転じて、同国の済州島ではGlobal Education Jeju Cityの準備が着々と進んでいると聞く。欧米の大学を誘致して韓国の学生に“留学”させる巨大な仮想英語コミュニティーの出現である。

私の研究仲間には韓国の教育政策を専門にしている研究者がたくさんいるが、彼らによれば、韓国における革新的英語教育政策は10年以上が経過した今、評価の時期に来ている

という。韓国における小学校 3 年からの早期英語教育を初めとした種々の教育政策の成果と問題点は何か。日本の英語教育に多くの示唆があろう。先入観を持たず、韓国の英語教育政策の実態を学生と共にじっくりと見据えることのできる「教職フィールドワーク」にしたいと考えている。

予想に違わず、韓流ブーム・円高の影響でシーズンオフにも関わらず 2 月のソウルは日本人で溢れていた。韓国語を話さない筆者が英語で話しかけると、日本人とわかるや否や返答は日本語に切り替えられる。タクシーに乗っても、明洞の街角でも日本語で何とか事足りるのにはいささか驚いた。経済が言語を支配しているかのような。帰国直前、空港の売店の女性店員の日本語の流暢さに、思わず尋ねてみた。

「日本語はどれくらい勉強したんですか？」

「就職した時に 2, 3 カ月日本語を勉強しました。」

「2, 3 カ月でそんなにうまくなれるんですね。」

「はい、私はここに 18 年間勤めていますから。」

「. . .」

一個人が、仕事や生活の必要性に迫られて複数の言語を使いこなす「複言語主義」の一面を韓国社会の中に見た気がした。